

# 英語教育と能力別指導（研究ノート）

月 山 み ね 子

## I 受験体制と能力別指導

日本の教育問題に焦点をあてた場合に受験体制——この場合大学受験——はさけてとおることのできないものの一つである。1975年日本の総人口は111,933,818で同じ年高校生、大学生の数は次の通りであった。

中学生	4,762,444
高校生	4,332,719
大学生	1,734,082
短大生	353,784
高専の学生	47,955

中学校より高等学校へ入学する学生は91.9%，高等学校より大学へ入学する学生は34.2%であったが現在では40%強が大学に進学するわけである。大学の数は当時で次のようであった。

四 年 制	}	国立	81
		公立	34
		私立	305
			<hr/> 420
高等専門学校	}	国立	54
		公立	4
		私立	7
			<hr/> 65

短	大	国立	31
		公立	48
		私立	434
			<hr/> 513

大学人であった永井道雄氏が、文部大臣として就任した当時に、受験戦争を緩和するために打ち出した方策に「四頭立ての馬車」といわれるものがあった。その内容は大体つぎのようであったとおもわれる。(1) 小学校・中学校・高等学校の教育課程を人間として、よりゆとりと調和のとれたものに改善し (2) 大学入試制度を改善し、そうすることによって (3) 大学間の格差を是正して多様化する。(4) それと同時に企業側にも呼びかけて学歴偏重を改め、採用方針を変えてもらうようにする。この永井道雄氏の発言は、一國の文相がその在任中にメスをいれなければならないと決意させるほどの受験戦争が存在して、それがわが国の中学校・高等学校の教育課程に大きな影響を与えていることがたっているようである。

受験競争の弊害というマス・コミをとおしては、幼児から一流大学、一流学部を目指しての受験特訓がとりあげられる。しかし受験勉強とは大学入試のための勉強だけのことではない。学校での勉強体験が総体として受験勉強であり、受験勉強的なものとなっている。すなわち勉強というものは、「与えられたコースに忠実にしたがって整理された知識・概念・法則を覚え、それを出された問題に対応してうまく使うことであり、学生もそうであると信じきっていること、高等学校の教育課程を消化すること自体が受験勉強になっており、勉強といえばそういうことだとおもい信じきっている素直で健康な青年が生まれてきていること。ここに受験競争—受験勉強の弊害があらわれているといえる。」

(入学者選抜方改善資料集宮城教育大学編)

またこれを助長するかのようには中学校、高等学校で、学習速度の個人差・習熟度の個人差の問題を解決するための能力別学級編成が、受験対策ということにすりかわっていることである。

## II 能力別編成の是非論

今ここで「受験」ということからなれて、教育に「能力別」を採用することに対する是非論の根底にある基本的教育理念についてとりあげてみよう。能力別学校、能力別学級を否定する人達の最大の理由は、それが民主主義の原理に反するという点であるようだ。人間の人格は本来、平等であるのに能力によって学習者をふりわけるのは、能力主義的な「差別」「選別」に他ならない。能力差が存在していることを認めないわけではないが、いろいろな能力の持ち主が集団を形成し相互に協力し、学習し合ってこそ真に民主的な人格形成が可能である。現在の社会、学習者が将来入っていく社会はいろいろな能力の人間から成り立っている。だから学校や学級もその縮図でなくてはならない。優秀な能力と判定された学習者が優越感を抱いて傲慢な秀才意識にとりつかれ、劣っていると判定された学習者が、劣等感にさいなまれて絶望や反抗心を抱くことになる危険性がある。さらに能力の定義、判別の方法が決して確立されていない。人間は誰でもそれぞれ長所、短所を持っている。知能がすぐれていても身体的能力、社会的能力は劣った人間もいるし、その知能にしても記憶力もあれば、推理力、創造力もある。したがって能力別編成といってもどの能力とするか、能力の客観的判定・鑑別することの難しさなどが能力別学校・能力別学級に反対する理由の基盤にあるように考えられる。

これに対して賛成する人達は、個人の能力差を素直に認めるということから出発する。この人達がよく引用する古典にプラトンの「国家」篇の中に展開された教育論がある。プラトンは人間をありのままにとらえ、個人間の自然的素質の差異を率直に認め、それぞれの素質に適した教育・訓練こそ理想国家建設のための最大重要事項と考えている。プラトンの理想国家論に全面的に賛成できないとしても、教育論の中に今日の教育者があまりふれたがらない卓識がみられるというのである。素質、環境、意志力その他の諸種の要因が教育過程のなかで相互作用していくとしても、学習者の能力や素質や特性に適合した教育をおこなうのが本人自身にも、社会にとっても一番望ましい。

ただしこの場合に忘れてはならないのは、西欧世界にみられる神からみれば、すべての人間は罪人であり、神の愛によってのみ救われるという原罪思想の骨子がわが国に稀薄である。あるいは存在していないとということである。すなわち、西欧では人間一人一人神によって愛されているから尊いという思想が、人間の自然的素質の差異を率直に認める根底に存在していることをのみがしてはならない、「神の前における人間の平等という観念が薄弱あるいは皆無で、知的教育偏重傾向が強くなった戦後のわが国では、狭義の学力差が人間の優劣差と同一視されて、人々の間に不必要な混乱と焦燥感を生みだしているだけである。人間の素質や能力が平等だというのは虚偽であることは誰も知っている。そのような虚偽をまことしやかに主張する教育者はまさしく偽善者である。」という渡辺一氏（防衛大学教授）の論を引用して能力別編成を是とする人々の論をむすぶことにする。

### Ⅲ 能力別指導の形態

個人の能力差・学力差を認め、それによって学習者を等質に配分して指導することが、教育的見地からみて是か非の問題はさておいて現状に焦点をあてることにする。現実の教育界に能力別学校・能力別学級が存在していることは厳然たる事実である。義務教育の小学校・中学校は問題外としても、入学試験で受験生を選別し輪切りにしている高等学校、大学はある意味で能力別学校といえるし、その内部で能力別編成がおこなわれている高等学校、大学のあることも衆知のことである。

能力別指導を組織ないし形態の上から分類すると次の五つのレベルが考えられる。(1) 能力別学校 (2) 能力別学級 (3) 能力別集団 (4) 個別指導 (5) 無学年制と早期進級制。能力別学校とは学校ごとにある程度、同じくらいの能力をもった学習者ばかり集めるものであり、能力別学級とは学校の内部に多様な学習者がいるとしても、上位の学力者、中位の学力者、下位の学力者の級など学級ごとに同じような学力の学習者を配分することである。能力別集団と

## 英語教育と能力別指導

は、一つの学級にはいろいろの学力の学習者がいるが、それを能力別にいくつかの小集団に分けて指導する形態を指し、個別指導とは、学校・学級を小集団のいかんにかかわらず、個々の学習者の能力差に対応した指導をおこなうことをいう。したがって個別指導は前の三つに並列しうるものとはいえない。それは「一人一人を見つめ個人差に応じた」教育であっていわばあらゆる形態の指導に適用される原理である。

しかしこの原理を一人の教師が限られた時間に、多様な学習者に適用することは物理的に無理である。したがってこの原理を一人の教師が具体化するには、ティーチング・マシンや集団反応測定器などの教育工学的機器の利用、能力別教材や課題を与えて個別学習をおこなうことに限られるであろう。またこのような限界は、第三の能力別集団についてもいえるわけで、普通に制度化された能力別指導の組織は、能力別学校か能力別学級のいずれかとなり、能力別集団や個別指導は其中で時に応じてみられるということになる。無学年制と早期進級制、能力の水準に個人差があるだけでなく、その発達や成長の速度にも個人差があるといわれる。非常に早い速度で要求された到達度にいたる学習者もあれば、遅い速度で到達度にいたる学習者もあるわけで、現在の学校ではこの学習速度の個人差を無視して一律に暦年齢による学年制を採用している。これも能力別指導の見地からみると、納得しにくい人為的制度であるといえる。能力水準が高く学習速度のはやい者には暦年齢を無視して飛び級させてもよいわけで、逆に遅進者には普通の者が一年かかるところを二年かけてもよいといえるであろう。暦年齢の観念を撤廃することによって、能力別指導は徹底するだろうといえる。この点で、無学年制や早期進級制は能力別指導を考える時に念頭におかねばならない編成といえるであろう。

## IV 習熟度別学級編成

「習熟度」別学級編成を考えるとときにこれと「能力」や「学力」の高低とどのように異なるのかという疑問がある。「習熟度」「習熟の程度」にかぎって考

えた場合に習熟の内容をどう押えるかということと測定の仕方を検討する必要がある。たとえばある「ことば」を学習したとしてそれを要するに試験まで読めないように復習し習熟させておく場合もあるし、更に単なる会話の技法的レベルにとどまらず、もう一步その人の人格の一部にまで内面化され、その人のことばとして人格性と切り離せなくなるまで習熟させる場合もある。何のための習熟かという習熟の目標によって到達すべき水準は異なるのである。ただ単に習熟度というのを学習者の学力の一番先の者から最後まで一元的に序列化して学級編成するということでは安易にすぎるといふ論もある。

習熟度の測定の問題であるが習熟度の現実の理解は何らかの「成績」によってしか得られない。すなわち測定の結果として得られたデータがもとになって習熟度の高低が決められるとすれば測定の仕方が重要な意味をもつことになる。したがってペーパーテストによって測定された成績のみが学級編成の絶対的な基準になるというのはきわめて問題である。習熟度の度を調べるのにはペーパーテストのみでなく多面的な様々のデータを収集しなければならない。「習熟度」の内容の中に、習熟を妨げている要因の差異、さらに本人の意志、モチベーション等も不可欠のものとして扱われなければならないであろう。

## V 英語学習と能力別学級編成

J. B. キャロルは1969年にわが国を訪れて、言語心理学者の立場からわが国の英語教育に関して数々の示唆にとむ講義をおこなった。「教授と学習」と題する講義の中で各学習者に学習の速度に個人差があるモデルと時間的に無制限である場合でも習熟度に個人差があるモデルを图示した。かれ自身、この二つのモデルのいずれがより正確であるか決定できる確実な資料は持ち合せていないが、学習速度に個人差があることはかなりはっきりとした証拠があると述べている。この場合の学習速度の個人差とは、各学習者が満足すべき習熟度の基準に到達するために必要とされる時間の量の個人差であるという。

## 英語教育と能力別指導

教育はすべての学習者をもその能力・個性に応じて十分に成長・発達させるものでなければならない。しかし英語教育のように累積的な学習が必要とされる教科では、学習速度における個人差はより明白にあらわれるものである。J. B. キャロルは学習速度の個人差を処理する合理的方法として能力別学級編成をあげている。またこの能力別学級編成は、特に外国語学習に適切であるとして、アメリカの「平和部隊」の語学集中訓練コースの資料を公表し実証している。ここで英語学習と能力別学級編成にはいる前に、諸外国の事情を吉田一衛氏（福岡教育大学教授）の報告を借りて述べることにする。

アメリカ——ピムスラー、キャロル、ガードナーなどによる外国語学習適性テストが早くから開発されている。このテストは外国語学習者の適性を診断し予言すること——学習者の個人差を知り、その差を適切に処理することがねらいである。次に能力差に応ずる指導があり具体的方法として（1）学業不振者の留年（2）優秀者のとびこし進級（3）自然学級における個人指導（4）能力別学級編成がある。優秀者のとびこし進級は高等学校・大学では利点があるものと認められている。能力別学級編成はむずかしい問題点——第一に本当の意味での等質の学級ではない。第二に学習者間に協調する機会を少なくして孤立させやすい。第三に学業不振者に劣等感や欲求不満をいだかせる。第四に優秀者に無理な点をとらせようとする社会的圧力がかかる——が指摘されているが優秀児教育はスプートニック打ち上げ以来力をいれ、能力ある学習者には暦年齢を無視した教育を実施し高度な教材を与えて指導することが試みられている。

ソ連——この国では英語を学習するのは5年生からであるが義務教育の段階では能力別学級編成はおこなっていないといわれる。共産主義イデオロギーでは学習者の能力に差があるのではなく、学力差は環境の諸要因によるものと考えられている。しかし学力差を考慮した教授がまったくなされていないのではなく、学業優秀者のみ集めて指導するピオネール・パレスがある。これは学業優秀者が犠牲になって充分能力を発揮していないため特別なトリートメントが

必要であるという国家の要請によってできたものである。ピオネール・パレスは特別なサークル制度で学業優秀者が教師の判断と口頭試問によって選出され、12～15人の小集団で外国語学習をはじめ特別な学科を放課後に学習するのである。

イギリス——能力別学校編制をとっている。学習者の能力に応じて中等教育はグラマー・スクール、テクニカル・スクール、モダン・スクールに分れていて、能力別という姿勢は、大学進学に最もつながりのあるグラマー・スクールで徹底しておこなわれている。グラマー・スクールは学力に基づいて能力別学級を編成し、上級学年では外国語を含む専攻科目によりいくつかの能力別学級に学習者は振り分けられる。

フランス——フランスでも中学校は大衆教育機関となり、学習者の適性・興味・性格に合った進路を指導し、学習者個人の価値は他のすべての価値と等価であるという前提に立って、さまざまな学習者の差異を発見することを目標として、分団学級・グループ学習形式による特別指導学習がおこなわれている。またこの指導形態をとをして、能力の豊かな者に対する特別教育も可能であり、いわゆる英才教育にも使用されてゐる。

日本では新制中学校が発足したのは昭和22年で、学力差の大きい学習者達が入学したことから「学力」の問題が大きく取り上げられた。当時の学力の問題は戦前の学習者は基礎学力があったが戦後の学習者にはそれがないという。戦前と戦後の比較の形で「学力」は評価されたのである。その後も学力の問題は学力の個人差、地域差、学校差、男女差のような点——個人差が知能的素質以前の種々な要因に規定されているということが特色であったといわれる。しかし英語の能力別学級編成を考える必要がうまれてきたのは、義務教育のための中学校の発足と、中学校から高等学校への進学者が増加し高等学校が義務教育化して英語学力の高い者と低い者との一斉指導が困難になってきたことからである。当初の能力別学級編成は少くとも学力の高い者と低い者との両者の学習効果をあげることを目標にしていたようであるが、高等学校から大学へ進学す



## 英語教育と能力別指導

る者の数が増大し有名大学への進学率が云々される現在では、能力別学級編成は個人差を合理的に処置するものというよりも、受験体制のためにのみ存在している観があるようである。

英語は累積的知識や技能が必要な教科の一つであり、能力別に指導する方が学習効果があがるということ、大学や特別なコースの外国語教育では言語技術を習得するためには学習者、教授者の両面からみて能力別学級編成が必要であることは衆人の認めることである。キャロルは、学校における外国語教育について、「学習者の進度に個人差がある以上、各個人は高度な動機づけをもっていても、求められる習熟度に到達するには、さまざまな学習時間の量が配慮されねばならない。そしてこれを実施する方法の一つに学習者が自己の進度の程度、熟達度に応じて各種のクラスまたはグループに配置される能力別学級編成がある。」また能力別学級の利点として「本当に聡明でよくできる学生は自然学級で学習するよりも能力別学級のほうが長足に進歩をとげる。」と述べている。またこの編成の欠点である遅進者クラスの中に配置された学習者もつ劣等感・教師の中に遅進者を教えたいとあまりおもわない傾向があることなどを挙げているが、これらの欠点が克服されるならば、能力別学級編成は学習者の個人差を処理する最も合理的、効果的な方法であると立証しているのである。

## VI 能力別学級編成——学習者からみて

能力別学級編成を実施する場合に留意しなければならないことは、教育の効果は「自己実現的予言」という心理要素に左右されることが大きいということである。「自己実現的予言」というのは、ある目標を達成できるという一種の暗示を与えられると、実際にその目標が達成されるという効果である。学習者集団を優秀者グループと遅進者グループにわけた場合に、優秀者グループに編入された学習者は、そのグループに配置されたこと自体が「自分はよくできる」という自信を植えつけられたことになり、実際により結果を生むことが多いのである。このように考えると学生を一定の基準で「優秀者」「遅進者」に

わけた場合に「遅進者」に編入された学習者も、もし「優秀者」のグループに入れられたら成績が向上するかもしれない。このような効果は心理学では「ピグマリオン効果」とよばれている。「ピグマリオン効果」とはある可能性を信じるとそれが現実になるという効果である。つまり教師が学習者の可能性を信じ、また学習者の可能性に信頼をおいた制度をつくれればその可能性が現実となる効果である。この効果は、1964年ハーバード大学のロバート・ローゼンタールの調査によって明らかにされたことであり、キャロルもこの点をかれの講義の中で指摘している。

またもう一つの重要なことは優秀者グループに編入されたために自信を得たり、逆に遅進者グループに入れられたために自信を喪失したりするといっても、これはそのようなことがありうるということであって遅進者グループに入れられたために発奮するという学習者もいるであろう。つまり能力別学級編成という同一のトリートメントもその教育的効果は学習者の適性など学習者個人にかかわるさまざまな要因によって異なるということである。ここでいう適性とはきわめて広い意味においてであり、知的諸能力、性格の適性、認知型、態度、価値観などまで含めて考えられるものである。能力別学級編成をさらに徹底するために学習の個別化を図ることがある。個別化というトリートメントも適性との交互作用があることが十分に考えられる。すなわち学習の個別化によって達成が増進する学生と減退する学生がいることは、大学生についての研究の結果判明している。積極的に物事にとりくみ探索するようなタイプの学生には、学習を学生自身の考えや、計画に任せると学習意欲が高まるが、消極的な学生には教授者が、くわしく学習計画をたててやると効果があがるという研究調査がでている。能力別指導に関する問題点を学習者の観点からみていくつかあげたのであるが、一般に能力別指導のメリット・デメリットは指導上の観点から論ぜられることが多い。自然学級では授業がやりにくいのが、学習者の質が等質であれば指導がやりやすいといった論がそれであるが、しかし学習指導のメリット・デメリットは、誰にとってメリット・デメリットであるかを明らか

にする必要がある。教える者にとってのメリットは学習者にとってデメリットかもしれない。また多様な学習者の集団では、ある学習者にとってのメリットは他の学習者についてはデメリットのこともあるであろう。

## Ⅶ 能力別学級編成——教師側からみて

学級編成には「動的」ないし「移動式」とよばれる編成方式が望ましいことはいうまでもない。移動の方法は、一定の固定期間を学級全員に共通設定するか、各学習者に自由な形のものにするかの二つがある。最近では学力によって学習者を三つのグループに区分するよりも「精通学習」方式をとって、たとえば、書道のように「級制度」の学級編成方式を導入することも考えられている。これならば各学習者がある「級」にどれだけ長く在籍するかは自由であって、本人の努力次第で短期間に多くの「級」を終了することもできることになる。この方法はいわゆる「学力別」などという固定観念化された内容に陥る危険から免れ、「精通度」「習熟度」別という独自の意味を有効に表現できるものとおもわれる。「能力別」による場合は学習者を区分しているが、「級制度」では教育課程の方を区分している点で優れているといえる。

「能力別」にしる「習熟度別」もしくは「精通度制」にしても学級編成を教師側の教育活動を従来そのままにしておいて学習者の等質化をはかるのであれば、これは学習者のためであるというよりも、教師の教育活動の能率化、負担軽減のためであるということになる。「習熟度別学級編成が何よりも学習者のためのものでなければならぬとすれば、教師が学習者を教えやすくなったという感想は十分自戒ないし警戒しなければならない。」という識者の声もある。

それでは教師側の教育活動はどのように改善される必要があるだろうか。それは指導法と教材の点にあるとおもわれる。キャロルも、能力別学級編成と同時に学習者は進度の個人差に適切な教材が与えられていたこと、学習者その教材に精通して、次の新教材に進むために適切な教員組織の配置・学習施設の

充実があったことが、かれのスペイン語集中訓練のプログラムを成功させた要であるといっている。能力別または習熟度別に編成された学級が、指導法は相変らずのもので教材もただ内容の高低だけであれば無責任といえるのではないであろうか。教材はそれぞれの学級に固有のものが考慮されねばならないし、このような点の検討を深めることによって、習熟度の内容そのものの吟味や明確化に対する具体的な配慮や関心が喚起されてくるであろう。「能力別」「習熟度別」の学級編成は、集団の分解の方向でなく、個の尊重の方向から考えられるべきものである。

キャロルはアメリカ平和部隊に応募した有志者にスペイン語の集中訓練をおこなって成功をおさめている。この集中訓練は速進者グループと遅進者グループの習熟度別編成のもとで実施されたがそのプログラムの内は、

1. 応募者は大学卒業者
2. 集中訓練は8週間に集中されていて、スペイン語の総時間数は約200時間である。
3. 学生は毎日4～6時間の教室授業をうける。
4. 全寮制、寮内の生活で仲間同志、指導教師とスペイン語を使用して生活する。
5. クラスサイズは10～13名、視聴覚と訳読教授法が併用された。
6. 授業の進行につれて教師はつねに学生の進歩を評価し学習速度に応じてクラス編成替をおこなう。
7. 集中訓練の終了時にはスペイン語能力検査が実施されて、これに合格した受講生のみが2年間、ラテン・アメリカに派遣されてスペイン語を話す原住民と直接に作業をする。
8. ラテン・アメリカ滞在1年後に再度スペイン語能力テストを受講生はうける。

キャロルはこの実験をとおして、ラテン・アメリカの各国でスペイン語を楽々と効果的に話し理解するために必要な習熟度に到達するには、さらに12週間

## 英語教育と能力別指導

の集中訓練—総計 400 時間の授業時間が必要であると報告している。かれは教授の新理論・旧理論のちがいによる教師の意識改革などにもふれているが、これはまた次回にゆずることにする。

これまでわが国でおこなわれた新しい試みの多くが何程かマイナス・イメージで語られるのは、「個」を尊重するという意識の稀薄な日本では、能力別学級編成はすぐに能率化、差別化の方向に変質しやすい傾向があり、新しい試みをいかす諸条件が十分整備されないで、時間的に十分熟す余裕が与えられずに性急に実施した評価されたという、日本の事情が存在していたのではないであろうか。教師の意識改革、学校当局による学習条件の整備など責任ある態度がとられるとき、始めてこのような試みが成功するといわれる。能力別、習熟度別編成の導入は時間をかけ、一気にやるのではなく、部分的におこないながら一つ一つ問題を処理していく慎重で責任ある態度が求められるのもこの理由によるものであろう。

(本学助教授)